

# 日本語のPolitenessと対人行動に関する一考察

熊井浩子

## 【要旨】

本稿では、Brown & LevinsonのPoliteness理論及び宇佐美のディスコース・ポライトネスやWattsのPolitical Behaviourの概念を取り入れ、Politenessを、話し手が聞き手との社会的距離などの状況をもとに算出した規範などに照らして幅をもって設定された言語的、非言語的行動の基本形と、そこからのストラテジーとしての離脱や回帰の幅とHの期待との差が生み出す効果であると捉える。その差がトータルとして許容範囲内である場合にはニュートラルまたはプラス効果、許容範囲を越えている場合にマイナス効果になると考えられる。また、話し手の行動選択に結びつく要因として心理的距離を加え、さらに、規範やストラテジーに基づく合理的選択だけでなく、感情などの非合理的な選択をも考慮するとともに、話し手と聞き手のダイナミックな相互作用として、Politenessに関わる対人行動をよりの確に描きうる包括的モデルを提示した。

【キーワード】 Politeness 敬語 対人行動 心理的距離 規範

## 1. はじめに

近年、Brown & Levinson (1987) (以下、B&L) のPoliteness普遍理論ほど、語用論の分野に大きなインパクトをもたらした研究はないであろう。しかし同時に、個人主義に立脚したアングロサクソン文化に偏った見方であるとして、非ヨーロッパ系言語の研究者、特に体系的に発達した敬語を持つアジア系言語の研究者の間で、その普遍性を巡って激しい議論がまき起こったことも事実である。日本語に関してもIde (1989) 及びMatsumoto (1988) 等がこの理論では日本の敬語使用が説明できないとして、これを痛烈に批判している。一方宇佐美 (2002b) やFukuda & Asato (2004) 等のように、敬語をもつ日本語の言語行動選択についても十分当てはまる理論であるとして、B&Lの普遍性及び意義を支持する立場もある。

これに対し中山 (2003) は、Politenessと親しさは重なる部分もあるが多くの点で異なるとし、「親しさのコミュニケーション」という視点からPolitenessとは違った立場で日本語の対人的コミュニケーションのモデルを提示している。しかし、私たちが対人的なインタラクティブな中で言語的・非言語的コミュニケーションを選択する（あるいはしない）場合、Politenessによる選択と親しさによる選択が全く切り離された形で別々に行われているわけではないであろう。それが社会的距離であれ心理的距離であれ、私たちはそのときどきのなんらかの対人的要素に左右されてコミュニケーションを行っているのである。それ故、対人行動をトータルに捉えるためには、この二つを融合した枠組みが不可欠となる。

もちろんコミュニケーションに影響を与えるのは対人的配慮だけではない。話題やコミュニケーションの媒体、機能によってもそれは大きな影響を受ける。しかし、本稿では私たちの言語的・非言語的行動に影響を与える諸要素の中から対人的側面に限定し、それらに関わる情報や感情がどのような形で言語的・非言語的選択に結びついていくのかを言語的選択に焦点を当てて考察していきたいと思う。また、B&Lを初めとする従来の語用論においては、合理的な判断のできる理想的な成人話者‘model person’が想定され、子供や非母語話者は考察の外に置かれていたと言えるが、現実の対人行動の話し手や聞き手はそのような理想的な者ばかりではない。さらに、怒り等の激情のために合理的な判断ができない場合もある。このような側面も考慮する必要がある。また、B&Lは聞き手との相互作用を考慮していないという批判もある。

そこでまず、次節でB&Lとそれを日本語の立場から捉えた代表的な論考を概観した後、中山(2003)の考察を取り上げ、この両者を包括し、さらに話し手や聞き手が子供や非母語話者である場合や感情的な言語行動も含む双方向的なインターアクションのモデルを提示することが本稿の目的である。

## 2. 先行研究

### 2.1 Brown & LevinsonのUniversal theory of Politeness

B&Lによれば、人間は「よく思われたい」「受け入れられたい」など、他者から評価されたい、受容されたいという欲求、即ちpositive face (以下、PF) と「踏み込まれたくない」、「邪魔されたくない」など、自己の領域と自己の行動の自由を守りたいという欲求、即ちnegative face (以下、NF) という二つの相反する基本的欲求をもっているとされる。しかし、命令する・断る・不満を言うなどのFace侵害行為 (face-threatening act、以下FTA) によってこのような欲求が満たされず、Faceが脅かされる可能性があるとき、円滑な対人関係を維持するため、その行為の侵害度の程度 (Weightiness of FTA、以下W) に応じ、それを軽減 (redress) するためのストラテジーを選択する。この侵害度を補償・軽減するストラテジーは、二つのFaceのどちらを顧慮するかによってnegative politeness (以下、NP) とpositive politeness (以下、PP) に分けられる。NPはNFに顧慮したもので、距離を置く、聞き手の領域に踏み込まず／決定権を与えよなど、聞き手が決定権を持つ言語行動の選択がこれにあたる。また、PPはPFに顧慮したもので、聞き手に対する好意・親しさを表す言語行動の選択がこれにあたる。

Faceを侵害する行為である場合、このPPやNPを含め、選択肢は5つある。今、相手にお金を貸してもらうように頼むという場面を例に考えると、もっともリスクが低いのはその侵害行為即ち依頼を行わない(5)Don't do the FTA.、もっともリスクが高いのは緩和措置を取らず、「金貸せよ！」とそのままの形で明言する(1)Bald on record [without redressive action]である。この2つの間に「今日、財布忘れちゃったんだよね」のように、直接依頼をするのではなく、ほのめかし・ヒントを出す(4)off recordと、on recordで行うやり方があるが、後者はさらに、「ねえ、マリちゃ〜ん、お金貸してくれるよね？」のような相手のPFに配慮した(2)PPと「お金を借りられると助かるんだけど」のように、相手のNFに配慮した(3)NPに分けられる。顧慮の大きさは数字の順に高いとされ、行為の

性質や相手の関係などから、対人的によりリスクの高い状況であればあるほど、相手のFaceに対する配慮が必要になってくるというのがこのB&Lの主張である。ある行為xのFace侵害度 $W_x$ は、下の(2)の公式のように、話し手(S)と聞き手(H)の社会的距離(Distance、以下D)、聞き手(H)の話し手(S)に対する力関係(Power、以下P)とその文化における行為自体の負荷度(Rating of imposition、以下R)によって決定される。

$$(2) \quad W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$$

例えば、同じ行為であっても、相手が親しいクラスメートの友人であればP・Dともに小さいが、ほとんど話したこともない教授である場合には、これに比べて侵害度は通常高くなるであろうし、同じ相手であっても、今そこにある消しゴムをちょっと借りる場合と比べれば、1万円借りる場合のほうが侵害度は高くなるわけである。また、行為の負荷度は文化によっても異なる。このような文化差も反映できる点がこの公式の特徴である。そして対人的インターアクションの中で、表面的な言語形式の違いにかかわらず、このような対人的配慮に関わる言語行動選択のストラテジーは普遍的であるというのがB&Lの主張である。この普遍性の当否を巡って、現在に至るまで、多くの議論がなされてきているわけである。以下、日本語に関する代表的な論考を概観する。

## 2.2 B&Lを批判する立場

### 2.2.1 Ideの考察

Ide (1989)によると、Politenessの体系にはストラテジーとして話し手の意志で選択できるvolitional politenessと、日本語の敬語のように、わきまえとしてコミュニケーションの中に体系的に組み込まれているものとの二種類がある。前者が効果的に目的を遂行するための合理的な意図に基づいた「はたらきかけ方式」であるに対し、後者は社会的慣習に基づいて選択された「わきまえ方式」であるとされる。さらにIdeはB&Lの枠組みの中で敬語はNPの一部として位置づけられているが、たくさんの言語形式の中から話し手の意思で自由に選ぶことができるストラテジーに基づく選択とは、1) 選択の範囲が限られている、2) その選択が社会語用論的、及び文法的に義務的である、3) Faceを脅かすような行為に限らず用いられ、ストラテジーとしての話し手の合理的な意思に依存していない、4) 話し手以外の対象にも用いられるという4点において根本的に異なっていると述べている。

そして、B&Lの敬意表現が発話の間接性を高めることから生まれる含意によって説明できるのに対し、日本語の敬語は参加者が相手の負担を避け、距離を保って改まった雰囲気を作り出すことであるとする。さらにIdeは、個人ではなく、集団の一員であることが対人的インターアクションの基本であると考えられる非西洋文化の中では、Faceよりも、それぞれの状況における集団の中での役割や位置が重要であるとする。即ち日本語の敬語とPolitenessの根本的な違いはFaceの内容そのものというよりはFaceの重要性の違いであるというのがIdeの結論である。

### 2.2.2 Matsumotoの考察

Matsumoto (1988) も日本語において、敬語使用の動機や、それによって伝えられる情報がB&Lの理論とは異なるとして、その普遍性に異を唱えている。Matsumotoによれば、日本のような文化的伝統の中では、人々の主要な関心は自己の領域を主張することではなく、むしろ集団のメンバーとして受け入れられ続けることであり、相手の負担を軽減することで相手のFaceに配慮を示すというより、相手に依存していることを知らしめることが重要であることを、「よろしく願います」を例に説明する。

(3) どうぞよろしく願います。

Matsumotoによれば、この「よろしく」は敬意を示すための決まり文句の一つではあるが、相手に負担を強いる表現であるため、敬意表現でありながら、聞き手の負担を軽くするためのNPとは異なった性質を持っており、B&LのNPでは説明することができない。また、頼りにしていると明言することは相手により自己イメージを与えることになり、日本語では望ましいことであると考えられているという。とすると、「よろしく」は他者から評価されたい、認められたいという欲求に配慮した表現ということになるが、敬意の表現であることから、親しさを表明することで相手への配慮を表すPPとも性質が異なる。このようなことから日本語の敬語は、B&Lの枠組みでは説明できないとMatsumotoは述べている。

Matsumotoはまた、日本語における敬語使用の目的は相手の負荷を軽減することによって聞き手のNFに対する配慮を示すことではなく、参加者間の上下関係を示すことであり、それ故英語では間接的でpoliteな表現となりうる(4)や(5)のような質問が日本語ではpoliteな依頼としては用いることができないとする。その代わりとして、(6)(7)のように、テモラウなどの授受を表す表現が多く用いられることから、日本語は負荷の軽減や行為の自由より、相手と自分との対人的関係の認識により大きな価値を置く言語であると結論づける。

(4) 持ちかすか。

(5) 持てますか。

(6) 持ってくださいますか。

(7) 持ってもらえますか。

さらにMatsumotoは、敬語は日本語において参加者の関係をコード化し、これを発話に明示する仕組みであり、ある状況では必ずある特定の形式が要求されるとする。それ故、日本語には中立的な表現はなく、(8)のように、それがFTAであるか否かにかかわらず、場面や参加者の関係に応じて義務的に選択されるものである点で、主に伝えようとする命題に応じて話者によって主体的に選択される英語の敬意表現とは異なっていると述べている。また、ストラテジーが聞き手を目指して行われるのに対し、日本語の敬語の選択は話し手と聞き手・話題主の関係に応じて選択される点も異なっていると述べている。

(8) 今日は土曜日だ。

以上のようなMatsumotoの議論は、おおむねIdeにそうものであると言える。

### 2.2.3 その他の批判

このほか、B&Lではより丁寧度が高いとされるほのめかしよりも間接的な表現のほうをより丁寧だと感じる人が多いというBlum-Kulka (1987) の調査や、間接性とPolitenessの関係などから、補償行為の順位付けについては、文化による差も大きく、多くの疑問が出されている。また、例えば目上の人に敬語を使い、その人の自己像を満足させるのはPPにあたるのではないかなど、どのような言語行為がどちらのPolitenessに含まれるのかなどについても様々な議論がなされている。

## 2.3 B&Lを支持する立場

### 2.3.1 Fukuda & Asatoの考察

一方Fukuda & Asato (2004) はわきまえ方式の敬語も、NPの事例としてB&Lの枠組みの中に位置づけられるものであるとし、IdeやMatsumotoに異を唱える。まず彼らは、Matsumotoの(9)(10)の例はたまたまその英語に対応する日本語が依頼を表す表現として用いられないだけであり、(11)(12)を例に日本語においても間接性が発話のPolitenessに貢献していると主張する。確かに、どのような場面でどのような間接的表現が用いられるのかは文化及び言語に依存しており、対応する日本語が英語同様の機能を果たしうるとは限らない。しかし、例えば、肯定文よりも否定文のほうが間接性が高く、丁寧度が高くなる場合があることなどからも、日本語においても間接性が丁寧さを左右することは疑いの余地はないであろう。

(9) 持ちかすか。(再掲)

(10) 持てますか。(再掲)

(11) 持ってくださいますか。

(12) 持ってくださいませんか。

彼らはまた、聞き手だけでなく、話題主にも敬語を用いるというIdeやMatsumotoの指摘に対し、その場にはない話題主や聞き手にとって身近でない話題主の場合には話題主に対する敬語を用いなくても不適切とはいえないことを指摘し、その理由を敬語を用いなくてもその場にはない話題主のFaceが脅かされることはなく、むしろ話題主に対する敬語は究極的には聞き手に向けられ、聞き手のFaceを維持するために使われているためであるとする。

また、敬語が規範に基づく自動的・絶対的な選択であるという指摘に対しては、教師が学生に何か依頼する場合、教師は普段普通体で接している学生に対して敬語を使う場合があるなど、行為の負荷の程度が引き金となって敬語が選択される場合もあるし、場面のあらたまりが話し手と聞き手の間に一時的な距離を生み、敬語が用いられることもあると指

摘する。逆に一時的に両者の距離が縮まって普通体が用いられることもあるため、ときには同じ聞き手に対する会話の中で丁寧体から普通体、あるいは普通体から丁寧体へのスイッチが起こる。しかしIdeのわきまえ説ではこのような現象を説明することができない。一方IdeやMatsumotoのFTAでない場面でも敬語は用いられるという主張に対しては、その行為の内容如何にかかわらず、目下の者が目上の人に話をする事自体がFTAになりうると説明する。

以上の点からFukuda & AsatoはB&LのPoliteness理論は日本語の敬語についても十分説明できる、普遍的な理論であると結論づけている。

### 2.3.2 宇佐美の考察

宇佐美(2002b)は、これまでのB&Lへの批判の多くは、人間の持つ基本的欲求として操作的に定義されたFaceが、面子などの訳が与えられ、文化的概念として捉えられてしまったこと、さまざまなPolitenessストラテジーの中の一つにすぎない敬語の理論とPoliteness理論が混同されてしまったこと、さらには、彼らが言う普遍性が各個別の言語使用の原則そのものではなく、日本語の敬語も含むより広い言語行動選択のメカニズムの普遍性であることが理解されていなかったことなどによる誤解から生まれたものであると述べている。さらに宇佐美は、負荷度の重みづけは文化によって異なることはRという形で既に公式に組み込まれており、文化差を考慮していないという批判は正しくないとする。そして、複雑に絡み合う社会的諸要因が総合的に反映された対人的コミュニケーション行動としてPolitenessを捉え、敬語を持つ言語もそうでない言語も同じような社会変数の影響を受け、同じ枠組みで捉えられる可能性を示したこと、及び敬語などのいわゆる丁寧な言語現象であるNPだけでなく、冗談やタメ語などのPPをPolitenessの中で重要なストラテジーとして全面に打ち出した点をその最大の功績であるとして、B&Lを評価している。

反面、基本的にPolitenessを文レベル、発話行為レベルにおける言語形式の丁寧度だけの問題として捉えているため、構造の違う言語の比較がしにくい、敬語のある言語における方略的な言語使用や敬語のない言語における社会言語学的規範や慣習に則った言語使用が十分考慮されていないなどの問題点を指摘する。また、特にポライトではないが失礼でもない言語行動やポライトでない言語行動の位置づけがされていないことや、Face侵害度の公式は話し手に焦点を当てたもので、話し手と聞き手の相互作用として捉えられていないことなどもB&Lの問題であるとする。

その上で宇佐美は、Politenessを、「言語行動のいくつかの要素がもたらす機能のダイナミクスな総体」ととらえ、ディスコース・ポライトネスを「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体」と定義する。そして、敬語がないにかかわらず存在する社会言語学的規範や慣習に則った言語使用と方略的な言語使用、及び両者の相互作用として、ディスコースレベルでPolitenessを捉える、ディスコース・ポライトネスという立場を打ち立てている。

そこではPolitenessは、依頼など相手のFaceを脅かす行為をせざるをえないときにFace侵害度に応じてFTA軽減行為として行われる「絶対的ポライトネス」と、特に侵害度を

軽減する必要もない状態で、ある言語文化における特定の状況ごとに暗黙のうちに共有されている、守られて当たり前な状態、即ち無標行動によって構成される基本状態からの離脱や回帰という言語行動の動きから捉えられる「相対的ポライトネス」とに分けられる。前者は有標ポライトネスであり、話し手と聞き手の侵害度の見積もりのギャップに基づいて実質的効果が予想されるものである。一方後者は発話の総体としての談話及び、談話内の敬体の使用度やあいづちの頻度などの談話内の各要素の基本状態から相対的に捉えられた有標行動によって効果が同定される。語用論的Politenessを実質的に生み出すのは言語形式それ自体の丁寧度ではなく、この基本状態からの離脱や回帰という言語行動の動きであり、これが実質的なポライトネス効果を生み出すものとされる。

そして、有標ポライトネスの実質的効果として、話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりのずれをポライトネス値という形で数値化し、その適切範囲を、話し手の見積もりから聞き手の見積もりを引いた値が「0」を含めた「 $0 \pm \alpha$  (許容されるずれ幅)」以内に収まっている場合であるとし、これを「プラス効果」と捉える。一方、この適切範囲を超えた+の値や-の値はそれぞれ過剰行動、または過小行動となり、「マイナス効果」とみなされる。さらに、有標行動の効果は、無標ポライトネスである「ニュートラル効果」をはさんで、相手が心地よいと感じる、あるいは改まった、丁寧だ、と感じる「プラス効果」と、相手が不快だと感じる、あるいは、失礼だと感じる、「マイナス効果」とに分けられる。このような捉え方は、宇佐美自身が述べるように、話し手の負荷度の見積もりに重きが置かれたB&Lの理論とは異なり、相互作用としてのコミュニケーションのメカニズムを体系化したものであるといえる。Usami (2002) ではこの枠組みを用いて初対面同士の会話を分析し、話題導入の頻度や「ね」の使用などがディスコース・ポライトネスに果たす機能を実証的に考察している。

#### 2.4 よりよいPoliteness理論に向けて —残された問題点—

筆者もFukuda & Asato (2004) や宇佐美 (2002b) と同じ観点から基本的にはB&Lの普遍性を支持する立場を取るが、宇佐美の指摘するようないくつかの問題点を孕んでおり、相互作用としての言語行動をダイナミックに描くためには、ディスコース・ポライトネスとしてこれを捉えて行くことが不可欠であると考え。話し手は、Wの見積もりに応じて初めからすべての言語行動をプランニングしているわけではなく、インターアクションの中で聞き手とダイナミックな交渉を行ないながら、そのつどフィードバックされ、修正されうるものである。こうした立場から、さらにB&Lの問題点を考えてみると、まず、侵害度の程度に応じた補償行為の順位付けについては言語行動を正しく反映していないという批判が多く出されていることは前にも触れたが、問題なのは順位付けだけでなく、侵害度が高い場合にはNP、そうでない場合にはPPが選択されるというような固定的な見方そのものであると言える。

例えばMatsumotoは、日本社会で大切なのは集団のメンバーとして受け入れられ続けることであって、そのため相手の負担を軽減することより、相手に依存していることを知らしめることが重要であるとする。そして、このようなPoliteness選択の動機の違いが「よろしくお願いします」を例に説明されている。しかし、Politeness選択の動機及び

「よろしく申し上げます」の用法についての筆者の解釈はそうではない。まず、「よろしく申し上げます」は初めて会った人や同じグループになったり、いっしょになにかをすることになったりした人などに使う挨拶である。いわば、人と新しい関係を結ぶときの決まった表現といえる。もうひとつの用法は依頼の談話の中で用いられる表現である。では、まず、そもそも「よろしく申し上げます」はdeference、即ち、いわゆる敬意・距離の表現であろうか。「申し上げます」の形自体は「おVする」という謙譲語であるが、「よろしく申し上げます」の形で用いられる場合には謙譲語の意味合いは薄れており、(13)のように、大人が子供に対しても用いることができる慣用的な表現であることから考えても敬意の表現とはいえない。

(13) おばちゃん達、東京からお隣に引っ越してきたの。よろしく申し上げますね。

また、依頼に用いられるといっても、これが依頼表現としていきなり用いられるのではなく、(14)のように、通常は実質的な依頼が完了したあとに用いられるか、(15)のように、なかなか受け入れてもらえないときに懇願の表現として用いられる。もし、(16)のようにいきなり依頼表現として用いられたとしたら、非常にぶしつけで凶々しい印象を与えるであろう。

(14) — それで、先生に推薦状を書いていただきたいんですけど。  
— いいですよ。これが募集要項ですね。  
— はい、ありがとうございます。よろしく申し上げます。

(15) — 貸してと言われてもね・・・。  
— 今、どうしても必要なんです。よろしく申し上げます。

(16) — ?先生、すみません。今日お金を忘れてきたんですけど、よろしく申し上げます。

このように考えると、「よろしく」は形の上では相手に負担を強いる行為要求のように見えるが、実際には挨拶の場面のように、実質的な要求をしていない場合か、既に了承され、それ故これ以上NFを脅かす心配のない場合に、形式的に用いられているにすぎないことがわかる。日本語において、相手に頼っていることを示すことがPolitenessとして機能する可能性があることは間違いないが、それはあくまでも形の上であって、ごく親しい相手や目下の相手は別として、相手の行為を拘束することになる実質的な依頼は、直接的な依頼は避け、NPを用いて慎重になされるのが普通であろう。例えば下の(17)では、「ちゃん」という呼称を用い、相手の様子や行動に強い関心を示し(PP)、前置きや否定的な観測、条件などで相手に断る余地を与え(NP)ながら慎重に依頼が進められている例である。



- (17) a : はるちゃん、元気だった？わ、いい色に焼けてるね。  
 b : うん、沖縄に行ってきたんだ。  
 a : へ～、いいなあ。今度ゆっくり話聞かせて。ところでさあ、はるちゃんに頼みたいことがあるんだけど、忙しくて無理かな。できたらでいいんだけど・・・。  
 ・  
 ・  
 a : ありがとう。じゃあよろしくお願いします。

また、懇願として「よろしくお願いします」が用いられた場合でも、相手の行為を拘束するというよりは、窮状を訴え、相手の情緒にはたらきかけるストラテジーとして機能する。その場合でもそこに至るまでの過程で念入りな交渉が行われた後に用いられるのが普通である。

このように、この点は川口他（2002）にも同様の指摘があるが、実際にはある行為がNPだけ、PPだけで行われるわけではない。Face侵害度が高いと思われる行為である場合には、この両者が巧みに組み合わされて、相手の反応を見つつ念入りに行われるのが普通である。それ故、依頼の談話の一部で相手の好意に期待する「よろしくお願いします」が用いられたからといって、日本語において相手の行為を拘束する行為がpoliteとされる、さらには相手の負担を軽減することがpoliteではないという結論を出すのは不相当であろう。日本語においても相手の負担を軽減することで相手のFaceに配慮を示していることは明らかである。「よろしく」が、同じ集団に対する帰属意識や相手に頼っていることを示し、相手に情緒的に訴えるPPのストラテジーであるからこそ、目上の相手に対しては実質的に相手の行為を拘束する依頼表現そのものとしては使いにくいのである。

いずれにしても、相手の領域に踏み込まない、あるいは負担を軽減するというNPと集団の一員として自己を位置づけ、相手に依存していることを知らしめるPPのいずれもが日本語のPolitenessには重要であるが、「よろしくお願いします」の場合、前者が保証されているからこそ、後者が有効に機能すると言えるであろう。しかし、行為の侵害度が高い場合にはNP、そうでない場合にはPPが選択されるというような固定的な見方ではこのようなダイナミックな過程を描くことはできない。宇佐美の提案するディスコース・ポライトネスという視点からPolitenessを捉えることでのみ、そのような過程の全貌を描き出すことが可能になるであろう。

ただし、宇佐美はFace侵害度が高い場合にその侵害度を軽減する行為として行われる絶対的ポライトネスと特にそれを軽減する必要もない状況で、基本状態からの離脱や回帰という言語行動から捉える相対的ポライトネスを区別しているが、特にFTAが高くない場合といっても、日本語の場合には普通体か丁寧体か、尊敬語や謙譲語を用いるべきか否かというスピーチレベルの選択が常に働き、それが何らかの意味で相手の規範から逸脱している場合に聞き手に違和感を抱かせる可能性があることから、あらゆる言語行動が基本的にはFTAになり得る可能性を持っているといえる。

Watts（2003）は、ある状況で社会において適切であると考えられている言語的・非言語的行為をPolitical behaviourとし、これが自己または他者のFaceを守るために行われ

る行為、即ちFaceworkに関わる行為であるとする。そして、その行為が期待されたもの以上であると受け止められた場合がPolitenessであるとする。その余分なPolitenessは、参加者によって肯定的に捉えられる場合(polite)もあるし、逆に否定的に捉えられる場合(impolite)もありうる。即ち、常にpoliteまたはimpoliteな言語表現が存在するのではなく、ダイナミックな相互作用の中で、聞き手を含むインターアクションの参加者にpolite・impoliteの判断の余地が委ねられていることになる。話し手が状況を考慮してPolitenessを選択するというB&Lのいわば聞き手不在のPoliteness理論とは異なる点であり、また、ある状況で適切とされる行為が、個人の意図によって自由に選択できるものではなく、社会的に期待されている行為を前提として成立しているという点で筆者もWattsと同じ立場である。

一方、WattsのPolitical behaviourは通常は意識されないがこれに違反したときにその規範の存在に気づくという点は、そこからの逸脱が一般にpoliteまたはimpoliteと受け取られるとしている点で、宇佐美の無標ポライトネス・有標ポライトネスに通じる点があるといえるが、宇佐美はFace侵害度を軽減する必要がない場合のポライトネスである場合とそうでない場合のポライトネスを区別している点でWattsとは異なる。ディスコースレベルでPolitenessを捉えること及び基本状態からの離脱や回帰がポライトネス効果を生むと捉える点で、筆者も宇佐美を支持するが、全ての行動が本質的にはFTAになり得るという立場から、Watts同様宇佐美のように絶対的ポライトネスと相対的ポライトネスの区別はせず、いずれも、話し手が状況を考慮して規範と照らして選択する行為と受け手がもつ規範とのずれが、聞き手にどのように受け取られるかの問題であると捉える。

さらに宇佐美は相対的ポライトネスについては無標ポライトネスである基本形をはさんで、相手が心地よいと感じる、あるいは改まった、丁寧だと感じるプラス効果、相手が不快だと感じる、あるいは、失礼だと感じるマイナス効果に分け、このプラス効果・マイナス効果の2つはいずれも有標ポライトネスであるとしている。

しかし、そもそも基本形を形作る規範が話し手と聞き手の間でずれている場合には、基本形自体でも聞き手に不快だ、失礼だと感じさせる場合もあることを考えると、話し手の基本形が必ずしも無標とは言えないことになる。話し手の選択する基本形及び、基本形からの離脱や回帰と聞き手の期待の幅のずれが許容範囲を越えていない場合にpolite、即ちニュートラル効果又はプラス効果となり、ずれが許容範囲を越えている場合にimpolite、即ちマイナス効果になると考えるのが適切ではないだろうか。

これは、社会的規範に照らし、適切であると受け取られる行為をPolitenessと捉え、この規範をコアにして設定される聞き手の許容範囲の中にあるものをPoliteとする点でWattsとも異なる。話し手と聞き手の規範が一致し、特に丁寧だとも失礼だとも意識されない通常のニュートラルな行動を中心に、その許容範囲の中でより程度の高いNPやPPとなる行動が存在する。これを聞き手が丁寧あるいは親しみがあるなどと心地よいと感じればプラス効果となる。そしてそれが許容範囲から外れた場合に聞き手が不快だと感じるimpoliteとなり、これがマイナス効果となることになる。

さらに、ある状況における適切な行為は、B&Lの主張するように負荷度が高い場合にはより高い軽減行動が要求されるというように、軽減行動に高低というランクがあって、

それに応じて決定されるのではなく、Wattsの指摘するように、それぞれの状況でどのような行為が適切であるかは慣習として社会に共有されていると考える。そもそも行為の侵害度や軽減行動は単なる高低というランク付けでは捉えられない複雑な要素が含まれている。それ故、筆者はRやWではなく、話し手がPやDなどの対人的要素や非対人的要素などの状況を考慮してある行為を遂行する上で、社会的に適切だと受け取られていると話し手が考える言語的・非言語的行動であるPB (Polite Behavior) という規範に照らして実際の行動が選択され、実行されると捉える。

それ故、宇佐美はフェイス侵害度の軽減が必要な行為の場合、話し手と聞き手のフェイス侵害度のずれを数値化するとしているが、筆者は侵害度の高低の見積もり差ではなく、侵害度も考慮した上でインターアクションの参加者によって適切であると認識された行為PBからのずれがpoliteまたはimpoliteの効果を生むと捉える。また、NPやPPについては、行為の侵害度から見積もられた軽減行動の高低の序列ではなく、社会の中でのインターアクションにおいてだれもがもつNFやPFという要求をそれぞれ満たすための行為であって、それぞれの状況において規範PBに照らして適切なNPやPPが選択されると捉える。

さらに、B&LにはNPやPPを表すものとしてそれぞれ多くの言語表現が挙げられているが、同じ言語表現が選択されたとしても、その選択の動機やそれを聞き手がどのように受け取るのかという効果は状況によって異なる。B&Lにはこのような視点が欠けているように思われる。例えば、通常敬語などの敬意の表現はdeferenceを表すものとしてNPに入れられるが、Bowe & Martin (2007) は、連帯や格式張らない表現、親しみの表現だけでなく、目上の聞き手に敬意の表現や格式張った表現を使うことによって相手の望む自己像を満足させることが可能であるとして、B&LのPPのストラテジーの分類に疑問を投げかけている。筆者はこれを、B&LのPoliteness理論の中で、言語形式自体の分類とストラテジーとして用いられた場合の動機や効果を区別して考えていないために起こる問題であると考えられる。

この問題を「なさる?」「いらっしゃる?」のようなマスを伴わない尊敬語の用法を例に取って考えてみたい。現代敬語において、話題主に対する敬語の多くは通常丁寧語を伴って用いられ、丁寧語を用いる必要のない聞き手には用いられない場合が多いという傾向があるが、その一方で、普通体の会話でありながら、聞き手に対して尊敬語が用いられる場合がある。滝浦 (2008) はこのような尊敬語がある種の親しさのニュアンスを感じさせるのは、尊敬語そのものが親しさを表すことができるからではなく、丁寧語が用いられた場合に比べ相対的に話し手と聞き手の距離が小さくなることから生ずる含みであるとする。そして、親しさを敬語に内在する機能と見るのは丁寧語の不使用の効果と尊敬語使用の効果と取り違えた錯覚であり、敬語はあくまでも距離の表現であるとする。滝浦によれば、これは比較的年配の話し手が同輩や年下の相手に用いるケースが多い表現だということであるが、筆者の観察では必ずしも年配に限らず、例えば、比較的恵まれた家庭の子弟が通うとされる学校に子ども達が通う、親しくないわけではないお母さん同士など、同じ集団に属する女性同士がある種の親しさを込めて行う会話に見られることがある。滝浦の指摘のとおり、敬語そのものが親しさを表すのではないとすると、そのある種の親しさはどこからくるのであろうか。

筆者はこの敬語は、改まりや敬意の表現ではなく、例えば同じ「教養あるクラス」に属する仲間の連帯の表現、共通の基盤を強調するためのストラテジーとしての用法であると考える。それは、普通体で話し合える、それ故ある程度近い関係でありながら、敬語を使い合うことで、同じような規範を共有している、いわば「ちょっと上の」クラスに属している仲間意識を示す手段として機能しているのである。敬語自体が距離の表現であることは間違いないが、それがウチ意識を表すPPのストラテジーとして用いられる場合もあるということがわかる。敬語自体が親しさの表現なのではなく、敬語を使うことが仲間意識の反映となるわけである。一方、マスを伴わないこのような尊敬語が、自己の品格を表す手段として、そのような規範を共有していない相手に対し、自分とは「クラス」が違うのだということを知らしめるために用いられることもありえる。そのような敬語の用法はマイナスのPolitenessとなり、敬語は相手を阻害する役割を果たす。そして、いずれの場合も、聞き手がそれをどう捉えるのかはまた別の問題である。

このように、敬語に限らず言語形式や言語行動自体がNPであっても、それが使われ方によってはPPの手段となる場合があることになるし、その逆もありうる。この点からも、言語形式自体がどちらのPolitenessを表すかだけでなく、それがどのような意図で選択され、どのような発話効果を持つのかを区別して考える必要があることは明らかであろう。

また、FTAが決定される対人的要因としてB&LはDとPを設定しているが、滝浦(2005)はDは水平方向、Pは垂直方向の人間関係を表し、いずれも社会的人間関係の距離を表すとする。この社会的距離には、固定的な地位だけでなく、その場その場の力関係を反映した上下関係など、一時的な関係も含まれる。しかし、これらの社会的距離だけでなく、相手に親しみを感じているか、仲良くしたいと思っているかなどの、心理的距離も対人行動に大きな影響を与える。もちろん、目上で親しい関係ではない相手には親しみを感じにくいし、同じ立場の相手には親しみを感じやすいなど、社会的距離は心理的距離にも大きな影響を与えることもあり、この二つは完全に独立した変数とはいえず、この二つの距離が一致することもあるが、性質は異なる。例えば、社会的距離は大きくても、心理的に好意をもち、親しくなりたいと感じることもあるだろう。一方で、上下関係のない身近な関係にあっても、なんとなくウマが合わず、親しさを感じない、あるいは親しくなりたいと感じない場合もあるであろう。このような心理的な距離も公式に盛り込む必要があるであろう。

さらに、B&Lは合理的言語選択のできる理想的な話し手を想定しているが、話し手の意図がきちんと理解されるためには、聞き手についても話し手と同じ規範を共有した、合理的言語選択の理解できる理想的な成人を想定する必要があると思われる。しかし、実際には聞き手もさまざまであり、個人差のレベルだけでなく、非母語話者や子供など、話し手とは異なった規範をもっているかあるいは規範がまだ固まっていない聞き手も存在する。このような聞き手の場合には、話し手はいわゆる理想的な聞き手に対して行うのとは違う言語行動を行う可能性がある。とすると、社会的・心理的距離などの両者の関係だけでなく、相手がそもそもどのような聞き手であるのかも選択に大きな影響を与える。これは人間関係や心理的関係とは異なった要因である。さらに、話し手自身も常に合理的な選択をするわけではなく、怒りや恐怖などの感情によって言語行動が選択されることもありえる。

しかし、B&Lではこのような聞き手や話し手は初めから考察の外に置かれているため、このような点が考慮されていない。

さらに、聞き手の評価だけでなく、そのような相互作用そのものがその言語行動選択にどのように関わってくるのかも考慮する必要がある。次節ではこうした観点から日本語の Politeness 選択のメカニズムをさらに考察していく。

### 3. 日本語の Politeness

#### 3.1 社会的規範と語用論的ストラテジー

滝浦 (2005) は、Politeness 理論をもっぱら能動的な方略の理論と受け取ってしまう誤解は少なくないが、Politeness は選ばされるものとしての儀礼的側面と選びとるものとしての語用論的側面とを重層的に一体化したところで成立していると述べている。敬語の選択に規範意識が大きくはたらいっていることは事実であるが、例えば敬語の体系を持たない欧米の Politeness が、話し手の意図のみによって自由に選択されるというのは幻想である。程度やバリエーションの差はあるだろうが、どの言語にも対人的場面での言語使用は規範に基づいた選択と話し手の意図による選択との両面が必ずあるはずである。当然 B&L の理論にはその両方の面が盛り込まれているわけであるが、滝浦も指摘するように、B&L には、この両者の関係が明確な形で描かれているわけではないことも事実である。では、このわきまえ方式とはたらきかけ方式は、どのようにかかわっているのだろうか。

敬語が重要な役割を担っている日本語のコミュニケーションにおいても、狭義の敬語以外の言語行動もまた、社会的関係や負荷度などによって社会的規範とストラテジーとして選択される部分とがあり、対人行動の中で大きな役割を果たしている。しかし、狭義の敬語に関して言えば、Matsumoto の指摘のとおり、日本語において (18) のように、通常侵害度がなさそうに見える客観的事実であっても、丁寧体か普通体かのスピーチレベルの選択にかかわる P と D に対する顧慮はほぼ常にはたらいっていると考えられる。さらに社会規範として丁寧体のスピーチレベルが選択される場合には、その聞き手や聞き手と内の関係にある話題主に対する尊敬語や話し手の行為に対する謙譲語などの選択が必要になる場合もあり、より高いスピーチレベルが要求されることもある。

#### (18) 今日は土曜日だ。(再掲)

このように考えると、日本語において、規範による選択ともっとも関わりが深いのは、やはりスピーチレベルであろう。そこで、規範とストラテジーの関わりを、まず、敬語を中心に考えてみたい。日本は長い間上下関係に基づいたタテ社会であると見なされてきたが、戦後、社会は大きな変貌を遂げ、それに伴って敬語の用法も多様化している。それは単に固定的な社会的上下関係や年齢差によって決定されるのではなく、インターアクションの参加者間の関係についてその場その場で見積もられた距離が敬語使用を決定する重要な要因となっている。それ故、社会的に下位、あるいは年齢が下の者だけが敬語を使うのではなく、両者が相互に敬語を使い合う用法が多くなっている。また、両者の関係が一定であっても、場面によってスピーチレベルのシフトが行われることから、年齢や社会的

立場が下のものが上のものに敬語を使うという従来の説明はあてはまらないことがわかる。

さらに、もし仮にその選択が規範によって義務的なものであるならば、目上の話題主に関わるあらゆる物事について尊敬語や謙譲語を用いなければならないことになる。しかし、敬語が選択される場面であっても、もし学生が教師に対し、常に(19)のような尊敬語や謙譲語のオンパレードで話したとしたら、通常かえって不自然であろう。

- (19) ?先生はご授業でいろいろな教材をお使いになっていつもお荷物が多くいらっしゃるの、お車で大学にいらっしゃるとお聞きしましたが、浜松にお住まいでいらっしゃいますから、お宅をお出になるのは何時頃なんですか？

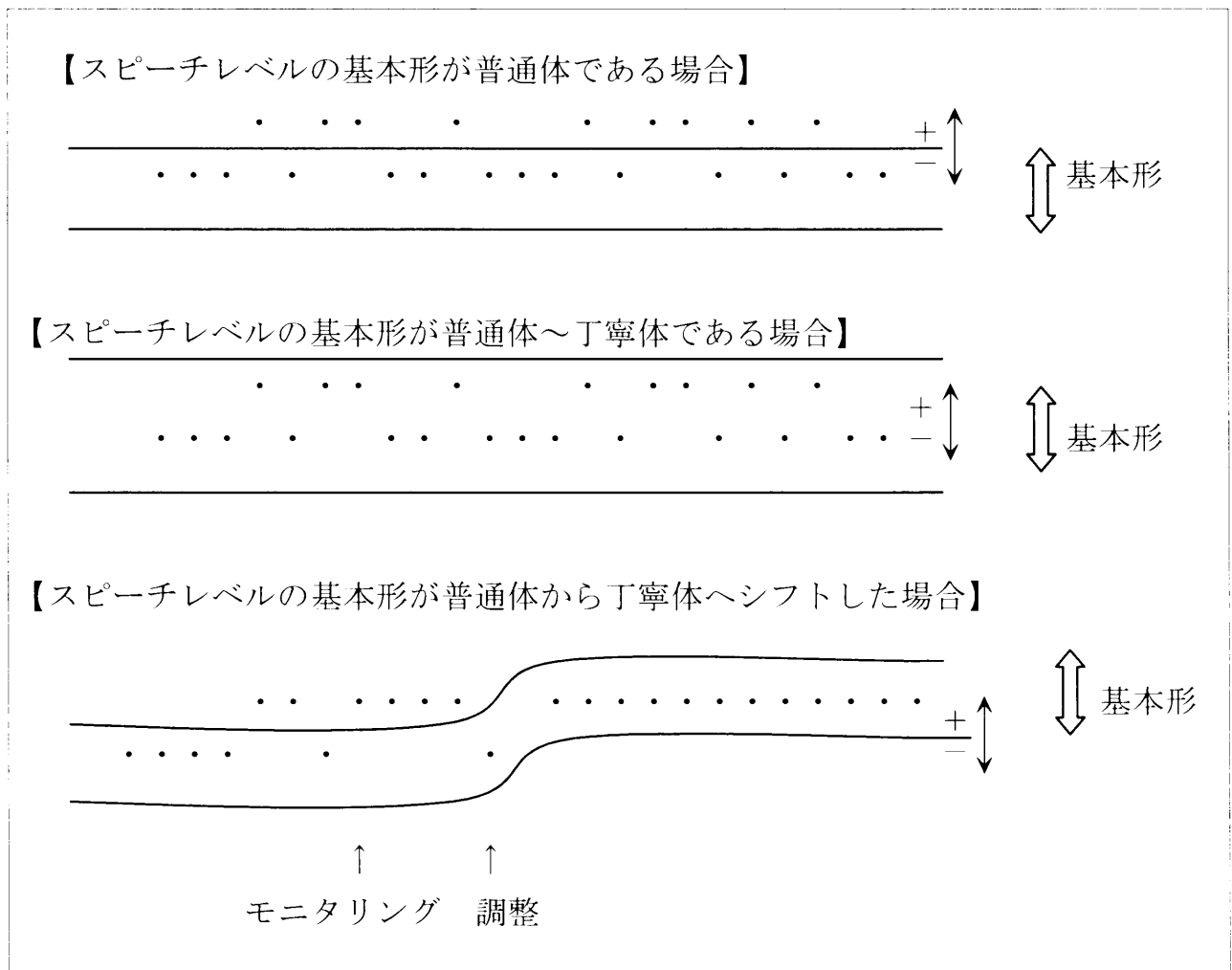
このように、敬語のレベルが談話の初めから終わりまで同じレベルであることは寧ろ稀であることから、敬語の選択がIdeやMatsumotoの指摘するような文法の一致のような自動的、義務的なものではないことは明らかである。このように考えると、ここでいう規範とはこのような場合には絶対にこうでなければならないという唯一無二のものではなく、それぞれの文化・社会の中である程度共有されているが、同時に個人のそれまでの経験や好みの中である幅をもってゆるやかに設定され、その幅の中を行き来し、トータルとしてその人のコミュニケーションを形成するものであると言えよう。

また、もし仮に一部間違いや不適切な用法があった場合、その違反は聞き手に留意されるかもしれないが、すぐさまそれだけでマイナスの評価がくだされるわけではない。聞き手はとりあえず、評価は留保して、その他の行動に照らし、その不適切な行動が、うっかりミスであるのか、あるいは、何か特別な意図が含まれているのかなど、話し手の意図を探りつつ、トータルで評価しようとする。例えば、片方がずっと普通体で話しているのに、相手がずっと丁寧体で話し続けた場合には、年齢差や上下関係がない場合には「よそよそしい」というマイナスの評価がはたらく可能性があるというように、違反が明らかに意図的な場合や繰り返されたり、頻繁だったりする場合は別であるが、そうでない場合には、聞き手も一つひとつの敬語の有無よりはトータルとしてのスピーチレベルがある範囲に収まっていればそれほど不適切だとは感じないであろう。

ただし、敬語の選択の中でも、普通体か丁寧かという制約は尊敬語の謙譲語のような話題主に対する敬語に比べて高く、その逸脱についての違和感は小さくない。三牧(2007)は、初対面同士の会話の分析をもとに、会話参加者は、発話ごとに無秩序に丁寧体・普通体というスピーチレベルを設定するのではなく、当該談話をとおして基本となるスピーチレベルを設定するとする。そして、この基本状態からの一時的なシフトがポライトネスストラテジーとして用いられるとしている。しかし、丁寧体も普通体いずれも用いることができる場合、どちらのスピーチレベルを選択するかは話し手の自由である。会話の開始部や重要な話題のときには丁寧体が多く、心理的な近づきがあった場合は普通体が用いられやすいという傾向はあるだろうが、特別な理由がなくてもこのシフトは起こりうる。このように、その基本形には幅があることも多い。また、話し手が自分の話し方や聞き手の反応、話し方などをモニタリングした結果、話し方の規範が修正され、基本形が変化することもありえる。この変化は一時的な場合もあるし、ある程度続く場合もある。

会話がある程度続く場合には次第に三牧の分析のようにどちらかが主になっていくと言えるが、例えば、学校行事に参加している特に親しくはないが会えば言葉を交わすという関係の母親同士が、イベントの合間あいまに交わす短いコミュニケーションでは、スピーチレベルが普通体と丁寧体の間を行き来する場合がある。このようなスピーチレベルのシフトは、個人的に特に親しいわけではなく、ある種の距離はあるが、三牧の調査のような初対面ではなく、また、母親として共通の活動に参加しているという連帯感もあることからくるものであるといえるが、このような場合、短い会話では、このシフトは不安定で、どちらのスタイルが基調であるか決められない場合も多い。話題の変化や心理的な近づきなどによる場合だけでなく、普通体で話していたけれど相手は丁寧体だったとので丁寧体にシフトするとか、あるいはその逆というように、相手のスピーチレベルに合わせて変化することも多い。しかしこれも、そもそも基本形自体が図1のように、社会的な規範をもとに、ある幅を持って決定されるものであると考えれば問題なく説明できる。

図1 スピーチレベルの基本形と言語行動のイメージ



このように、言語行動の選択は規範に規定されているので、その意味で、話し手がストラテジーとして100%自由に選び取れるものではないが、社会的規範から自動的に選択される唯一無二のものでもない。その規範はかなりの部分は社会の中で共有されているとはいえ、個人によって規範が異なることもあり得る。その範囲の中で、あるいは時に敢えてその範囲を逸脱して、ストラテジーとしてのPoliteness使用も可能となる。例えば、学生が教師に対して甘えた調子で⑳のように、普通体で懇願したとしても、両者の関係やパーソナリティによっては失礼とは言えず、寧ろ「しかたないなあ」という気持ちにさせられて、その依頼を聞き入れてしまうこともありうるのである。このような、情緒的に相手にはたらきかける用法や効果は女性語にもかかわっており、それが望ましい現象であるかどうかは別として、場合によっては目的を達成するための有効な手段になりえる。

### ⑳ 先生、お願い！

即ち、規範で緩やかに規定される基本形があるからこそ、ストラテジーとしての用法が効果を持つといえよう。このように、通常規範に基づいて選択される基本形は、多少の揺れも含みつつ緩やかに形成され、その範囲の中で、時に敢えてそれから逸脱することで語用論的な効果が生まれるわけである。

通常この規範の範囲が一致していれば、聞き手は特に相手のスピーチレベルを意識することもなく、ごく自然に会話は進む。また、両者の範囲にずれがあったとしても、それが許容範囲の中でのシフトであれば、ニュートラル又はプラスの効果を生み、許容範囲でない場合には、マイナスの効果を生むが、先に述べたように、一つだけの不適切な行動ですぐさまマイナスの評価が行われるわけではなく、他の言語行動と合わせてトータルな評価が行われるのが普通である。ここに文末のスピーチレベルだけでなく、尊敬語や謙譲語の使用・不使用まで含めて考察すれば、さらにその基本形に揺れが見られることは明らかであろう。

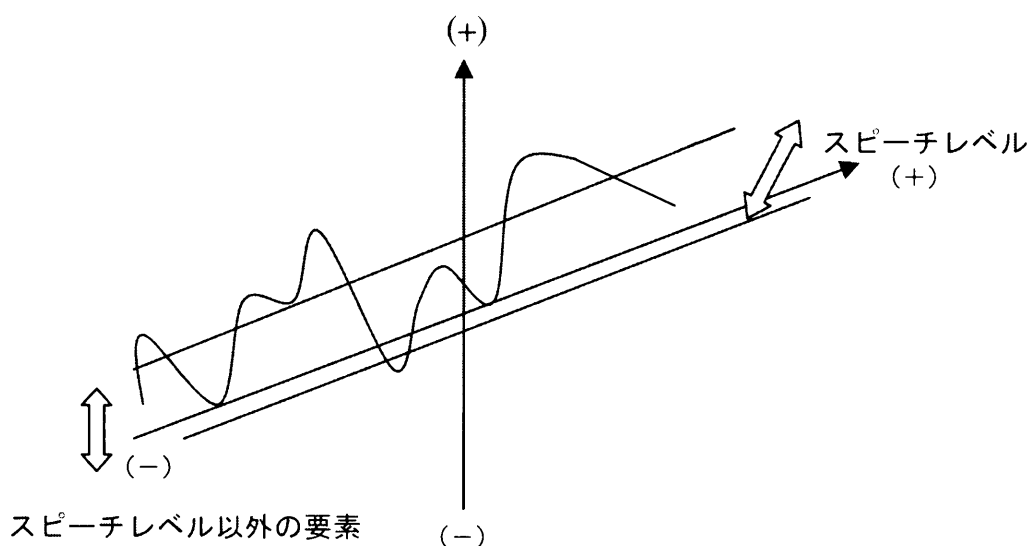
また、そこからさらに依頼表現や謝罪表現のような言語行動に対象を広げれば、その選択範囲はさらに大きくなる。例えば、仕事や発表の順番を替わってほしいという依頼をする場合、「順番替わってもらえないかな」や「順番替わってもらえると助かるんだけど」のような実質的な依頼の言語形式や、それに先立つ「実は先週から体調が悪くて」、「すみませんが」・「悪いんだけど」のような理由や謝罪などの前置きをするかどうかなどの言語行動も相手との関係やその依頼の負荷度と大きく関わっている。これらの言語形式や言語行動も、さらに敬語以上に緩やかな規範があり、その中で、さまざまな言語形式・行動が選択されると考えられる。先ほど考察したスピーチレベルの基本形とそれ以外の言語表現・言語行動の選択を図で表すと、下の図2のように、スピーチレベルと、それ以外のPolitenessに関わる要素という二つの尺度をもつ立体的な構図が浮かび上がってくる。ただし、スピーチレベルとそれ以外のPolitenessに関わる要素は相互に影響を与え合うものである。高いスピーチレベルが選択される場合とそうでない場合とでは、例えば依頼の際の前置きや理由の説明の中身自体や選択される語彙も異なる可能性があるからである。

その選択された行動と聞き手の期待とにずれがある場合には、聞き手は、話し手がその



状況でその行為を選択した意図を理解しようとするであろうし、その意図も含めトータルにその行動を評価する。そしてスピーチレベルやそれ以外の行為のいずれについても、話し手の基本形やストラテジーとしての選択と聞き手の期待との差が許容範囲である場合に polite 即ちニュートラル又はプラス効果、そうでない場合には、impolite 即ちマイナスの効果を持つといえよう。

図2 スピーチレベルとそれ以外の基本形とシフトのイメージ



依頼や断りなどのFTAが特に高くない普通のコミュニケーションの場合、開始の段階で、このような聞き手との上下／うちそとなどの関係からスピーチレベルが幅を持って決定される。よく接する相手であれば、これはほぼ自動化された行為である。初対面の場合には、相手の外見や話題などから得られる情報でPやDを予測し、一応無難なレベルが選ばれるのが普通であろう。そして、相手の反応及び自分の行動のモニタリングを通じてその言語選択が適切であるのかチェックされ、適切でない場合には調整が行われる。年下だと思っていた聞き手が実は年上だとか、話しているうちに子供の学校の先生だとわかったとかという、大きな関係把握上の変化がない場合には、通常、ちょっと丁寧すぎたとか、ちょっとなれなれしすぎたなどの微調整であって、そうした関係把握の劇的な変化がないかぎり、短期的にその聞き手に対する社会的規範やそれに基づいて選択される言語表現が大幅に変更されることはそれほど多くない。規範がある程度一定のところでは固まれば、その範囲の中で、必要に応じて尊敬語や謙譲語を選択する。特に、ごく目上の相手など、+のスピーチレベルが要求される相手であれば、言語行動の選択は非常に複雑になるため、なかなか気が抜けず、必要に応じて聞き手や聞き手と内の関係にある話題主に対する尊敬語や話し手の行為に対する謙譲語などの選択をしなければならない。逆に家族や親しい友人の場合には通常スピーチレベルに配慮する必要はない。しかし、依頼や断りといった通常の社会的距離がもたらしうるFTA以上に負荷度が高い行為を行う場合には、たとえ親しい間であっても意識的・無意識的な調整が行われる。ただし、これも遠慮のいらぬ間柄や、話し手が強い立場である場合には、顧慮の必要性が低くなり、直接的な依頼も可能

である。なお、この場合、聞き手は直接の聞き手だけでなく、聞き手に属する対象やそのインターアクションの間接的な聞き手も含まれる。

### 3.2 心理的・感情的側面とPoliteness

社会的距離自体はある程度固定的なものであっても、相手との心理的な距離は、話題やインターアクション中のできごとなどのために、刻一刻と変化している。そのようなミクロの変化の中にはその場限りのものもあるが、そのような変化が積み重なって、両者の親疎の関係が中・長期にわたって変わるのであれば、それは親疎におけるマクロの変化となり、それに伴って言語選択の規範そのものがシフトしていく。そしてその規範をベースとしてまた、一時的な心理的近づき・遠ざかりや感情の変化によってミクロの変化が起きるのである。社会的距離や一時的な心理的關係だけでなく、ある程度固定的な心理的距離も考察に入れてトータルに言語選択を考えるモデルが必要となってくる。

中山(2003)は「親しさ」を「人と人との間の心理的・社会的距離で、お互いの心地よさを損なわないもの。この距離を縮めようとする「動き」を伴う。」と仮に定義し、親しさの行動の大原則として、心理的距離を縮める・心地よくする・社会的距離を縮めるの3つ、行動の原則として①気遣いの原則・②分かち合いの原則・③リラックス1の原則・④信頼の原則・⑤安定の原則・⑥リラックス2の原則・⑦協力の原則・⑧連帯の原則の8つを挙げている。そして、中山は、この「親しさ」とPolitenessでいう社会的距離とは異なるとする。その主な理由は以下のとおりである。

1. 親しさは、人間の2つの要求を、対外的に見せる「顔」、即ちその人の「社会的評価」に関わるものでなく、人の心、即ちその人の内面的な「存在の自己評価」に関わるものである。
2. コミュニケーションは依頼や謝罪などの言語行為のみでない。そもそもコミュニケーションを持たないこと自体が、脅威になることがある。
3. 社会的距離が小さければFace侵害度は低くなるとされているが、実際には必ずしもそうではなく、親しいからこそ相手に気を遣うこともある。
4. 理性でコントロールして安全な範囲の侵害度を測れるなら、親しい人同士がしばしばコントロールを失って、お互いに傷つけ合うのはどうしてか、説明できない。
5. Politeness理論は、変化する距離としての親しさや、時間の経過を考慮しなければ使えない「信頼」などの原則を含んでいない。

筆者も、先に述べたように、Politeness理論で言語行動の選択に関わる要因としてあげられるP・Dは社会的距離であり、これと親しさなどの心理的距離は異なった性質のものであるという点では中山と同じ立場である。言語行動の選択は、常に社会的距離や負荷度に基づく規範やストラテジーによる合理的・意識的な選択ばかりではなく、社会的距離とも無関係ではないが、心理的な近づきや好悪・親疎の意識によって決定された心理的距離もその選択にはきわめて重要であり、このような社会的距離・心理的距離によってトータルに言語行動が選択されるという観点から、以下、「親しさ」に基づく言語行動はFace

で説明することができるのかどうか、また、Politeness理論と「親しさ」はどのような形で統合することができるのかを考える。

1の根拠として中山は、人はFaceの欲求が満たされないときには、「失礼だ」のようにまず相手への否定的な感情を感じるが、親しさを拒んだり、拒まれたりしたときは「どうして私って・・・」のような自己に対する否定的な感情を感じることに、及びFaceの欲求を求めるのは、それがつぶされて恥ずかしいと思う大人だが、親しさは、社会的な顔を持たないはずの子供やある種の動物にもあることを挙げている。前者については、明らかに年下の初対面の相手から、いきなり、「ねえ、おばさん、お金貸して」などと言われたら、私たちは「なんて失礼な」と感じるであろう。一方、クラスメートや同僚に笑顔で「おはよう」と挨拶したにもかかわらず、故意に無視されたとしたら、自分が拒絶されたと感じ、非常に傷つくであろう。しかし、筆者はいずれのFaceの欲求が侵害されるかによって生じるマイナスの感情として説明できるのではないかと考える。即ち、私たちは相手や相手と自分の関係についてある見積もりをもってコミュニケーションを行う。しかし、相手が自分の求めている以上に距離を縮めて来た場合、それが意図的であれ、無意識的であれ、受け手の方は「なれなれしい」と不快に感じてしまうことがある。これはNFの侵害であり、言葉遣いを知らない、ぶしつけだなど、相手の教養やパーソナリティなど、相手側の過失として、失礼だと感じやすい。一方相手が自分の求めている以上に距離を置いて接してきた場合にはPFが傷つけられたことになる。この場合はそれが意図的であれ、無意識的であれ、一義的には敬語操作上の未熟さという相手の教養の欠如やパーソナリティからくる失礼さであるとは受け取られにくく、通常自分が受け入れてもらえなかった、あるいは嫌われているという気持ちが強く意識され、自分の方の過失や問題であると感じやすい。これが、中山のいう「どうして私って・・・」のような自己に対する否定的な感情であると思われる。

もちろん、両者の見積もりに違いがあった場合、それがFaceの侵害と受け取られる場合だけではなく、こちらの見積もりより相手の見積もりの方が近い場合には、親しく接してもらえたと感じ、なんだか嬉しくなることもある。また、こちらの見積もりより相手の見積もりの方が遠く、思いがけず敬語を使われた場合、自分を上位の対象と捉えてくれているのだと満足する場合もありえる。これらは選択された言語表現は全く逆であるが、いずれもPFが満足された例といえる。いずれにしても、PFが満たされなければ自分が認められていないと感じ、NFが満たされなければ相手を失礼だと感じやすいという点で、異なるFaceへの侵害が与えるマイナスの効果として捉えることが可能であると考えられる。

1についての2番目の根拠に関して中山は、ある目的実現のために理性的に判断して行動する能力があるのは成人のみだからであるとしている。確かにB&Lが考察の対象としているのは、成人話者の合理的な言語選択のみである。以前筆者が参加したオーストラリアの大学院の語用論のクラスでも、様々な言語選択に関わる理論を説明するたびに担当の先生が「でも、病気の人や酔っぱらい、子供と外国人は別」と、その理論がこのような話し手には当てはまらないと口癖のように言っていたが、これは語用論が、合理的な言語選択のできる理想的な成人話者を考察の対象とし、上で述べたような人たちはその埒外に置かれてきたためである。しかし、言語行動の参加者は、理想的な成人母語話者である話し

手や聞き手だけではない。

また、B&LのFaceは前にも述べたとおり、いわゆる面子など、社会的・文化的色合いを帯びたものではなく、人間ならだれでももっている基本的欲求である。他者から評価されたい、受容されたいという欲求と踏み込まれたくない、邪魔されたくないという欲求は、例えば子供であれば「だっこしてほしい」、「好みに遊ばせてほしい」と感じるなど、その分化の程度やそれに伴う具体的な欲求の表れ方に違いはあっても、大人も子供も、そしてある種の動物にもあてはまる欲求であると思われる。とすると、Politenessも親しさも、自己や相手のFaceを守ることににおいては共通していると考えられるのではないだろうか。

2については、これはFukuda & Asatoの指摘のとおり、コミュニケーションを取る・取らないの選択自体がFaceを脅かすこともあるし、目上の人に対しタメ語を使うなどの不適切な言語使用は、相手のFaceを脅かす危険性があることを考えるとあらゆるコミュニケーション行動がFTAとなる可能性があることになる。即ち、Faceを脅かす行為は、依頼や断りなどの特定の言語行為に限らないわけである。3については、距離が短い相手であるからこそ負荷度が高くなる場合もあると考えれば説明できる。例えば、お金を10,000円貸してほしいという依頼を断るのは、街角で声をかけられた全く知らない相手よりもクラスメートの方がむずかしい。前者のような相手には通常お金を貸す義務はないからである。このように考えてみると、そもそもある行為の負荷の度合いも、参加者と独立して算出されるものでなく、P・Dなどの対人的距離と、それに応じてその文化・状況の中で決定されると考える必要があるであろう。そうした要因の階層性を考慮していない点でもB&Lの公式は単純すぎると言えるであろう。

4については、全ての言語選択が規範や語用論的方略として理性的に選択されるわけではないということの説明できる。激情に駆られて目上の相手をお前呼ばわりして怒鳴りつけることもあり得るし、酔っばらって、初対面の人になれなれしい話し方をしてしまうなど、その時々状況によって、理性的・意図的な選択ではなく、怒りや興奮、好悪などの激情によって選択が行われる場合もある。ただし、これも社会的・心理的距離が大きい相手に比べればそうでない遠慮のない相手の方が感情的な選択につながりやすいことを考えると、社会的・心理的距離は非理性的な感情のコントロールを容易にしたり不要にしたりするはたらきがあることがわかる。親しい人同士がしばしばコントロールを失って、お互いに傷つけ合うことがあるのもこのためである。中山は親しさを「お互いの心地よさを損なわないもの」としているが、遠慮のなさのためにBald on recordの言語行動や相手を傷つけるような感情的な言語行動が選択されやすくなることからすると、それは必ずしも「心地よさを損なわないもの」とは言えないことがわかる。

さらに、丁寧さと親しさの関係を中山は丁寧さはrapportがない場合に、相手とのスムーズな関係のコミュニケーションをするための潤滑油の役割を果たすものと言えるだろうとしている。しかし、Politenessには相手と距離を縮めるPPの言語表現選択も含まれる。Politenessに基づく言語選択が相手との良好な関係を保つために聞き手に配慮した言語使用であると捉えれば、意識的・合理的な選択だけでなく、rapportのような心理的な距離に基づく選択も含めて考えることが可能になるであろう。そしてそれは、時間によって変

化しうるものである。

このように、対人行動には、社会慣習に則ったわきまえ・規範として選択と、その規範を背景として、自己の目的を効果的に達成するためのストラテジーとしての選択といった理性的な選択に加え、心理的な距離による選択、そしてコントロールできない怒りや苦痛といった感情や感覚による選択が含まれる。理性的選択に比べて心理的・感情的な要因の方が強くはたらけば、規範を逸脱した行為が選択される場合もある。規範からの逸脱は polite と対をなす impolite な行動となることもありえる。Impoliteness は本稿の考察の対象ではないが、理性を失った場合だけでなく、例えば相手を傷つけたい、怒らせたい、あるいはそうなってもかまわないという意図的な選択もありえる。そのような、impolite なもの、失礼なものもトータルに考えて行く必要がある。このように、Politeness をいわゆる丁寧さではなく、「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」(宇佐美)と捉えるならば、親しさを含む対人的な顧慮に関わる行動全てを Politeness と捉えることは可能であると思われる。ただし、その場合には、社会的距離を表す P や D 以外の心理的距離を変数に盛り込む必要がある。今仮に、聞き手と話し手の心理的距離を C (closeness) としておこう。

C: 話し手 (S) と聞き手 (H) の心理的な距離

### 3.3 多様な話し手・聞き手と対人行動選択

子供の場合には、ごく小さいうちは眠い、暑い、お腹がすいた、好き、恥ずかしいなど、感覚や感情によって対人的行動選択が左右され、対人的な社会的慣習やそれに基づいた言語選択など要求されない。1歳児は嫌なものを渡されたら「イヤ」と言い、知らない人を見たら母親の後ろに隠れて話しかけられても答えない場合もあるだろうが、それで周りの人が、失礼だとか礼儀がなっていないなどと感じることはない。しかし、その成長の段階に応じて、例えば、「ちゃんとお返事して」、「『うん』じゃなくて『はい』でしょ」、「ありがとうって言いなさい」のような大人のはたらきかけや兄弟・友人の行動を観察することによって、次第に対人的配慮に関する社会的慣習や他者に対する言葉の使い分けなどの言語行動を身につけていくのである。子供はその成長の段階に応じた規範を獲得していくが、どのような規範に基づいて、どのような言語行動を選択するのかは、このような年齢だけでなく、細かい部分では個人差も見られるが、文化や社会によって規定されている面が大きい。また、非母語話者の場合も、もちろん実際には言語操作上の困難や心理的な条件によって、いつもその規範どおりの行動ができるとは限らないとしても使用言語の社会文化能力等の段階や母語の規範に応じて、それぞれの規範をもっている。また、成人母語話者は、聞き手が子供である場合と同様、非母語話者に対しても、⑵のように、母語話者に対するものとは異なる規範、即ち接触規範または相手言語規範を適用することも少なくない。それ故、母語規範からの逸脱があっても、非母語話者がただちにマイナスの評価を受けるとは限らない。寧ろ⑵のように相手の規範(と話し手が考える規範)に合わせて、母語話者自身が自己の言語行動を調整する場合もある。

(2) 非母語話者： 明日私のパーティーに来ますか？

母語話者： ああ、明日はダメね。

このような相手の属性や規範に対する顧慮はもちろん、目上であるから、相手の規範を尊重しよう、あるいは、親しいからこそ、いっそう相手の規範に合わせてあげたいと感じるなど、P・D・Cと全く独立した変数とは言えないが、P・DやCとは性質の違うものである。これは話し手と聞き手の関係・距離ではなく、聞き手そのものに対する顧慮である。この点も変数に加える必要がある。この変数を仮にH (Hearer、聞き手) とする。

H：聞き手の性別や絶対的な年齢、国籍、職業などの属性や言語行動の規範、実際になされた言語行動など、聞き手自身に関わる諸特性

例. 女性・子供・老人・非母語話者・共通語話者等

例えば、相手が子供や非母語話者であるから、わかりやすく話そうというように、わかりやすい言語行動が選択される場合もある。この点も考慮が必要である。

### 3.4 Politenessを含む総合的な対人行動

「親しさ」やPolitenessを含む人間の対人行動選択に関わるモデルを考える場合、選択に関わる合理的側面（規範・ストラテジー）や心理的・感情的要因を含んでいること、及び話し手と聞き手の規範が違う場合の調整や、子供・非母語話者の行動も説明できなければならない。

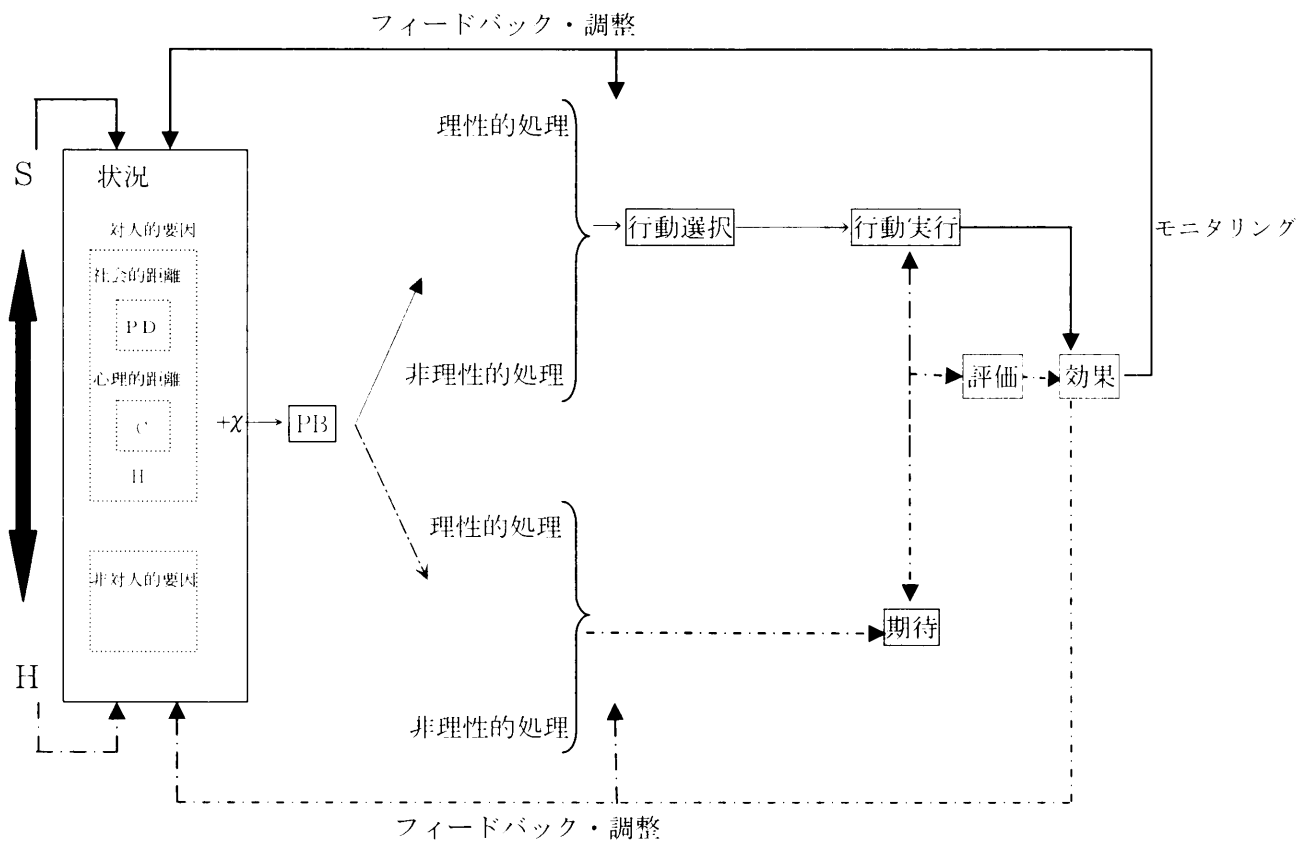
以上のような観点から対人行動の過程をまとめたのが図3である。対人的要因と非対人的要因からなる状況とその状況におけるある行為 $x$ によって、まず話し手が社会の中で適切であると考えられる範囲PB (Polite Behavior) が選択される。その選択に対し、理性的処理が行われる場合、規範に照らしてそれにふさわしい言語行動が選択されるか、ストラテジーとして、規範の範囲で、あるいは場合によっては規範を多少逸脱した行為も選択される。ただし、規範と言っても繰り返し述べるように、上下関係などによって機械的に選択される唯一無二のものではなく、話し手のそれまでの経験や好み、あるいは聞き手の言語行動なども考慮して、ゆるやかに設定された基本形を形成する規範である。

しかし、好悪などの感情や怒りや恐怖などの非理性的処理が行われる場合には、その程度によっては、例えば目上の相手や行為の負荷度が高い場合でも、そのような負荷度を無視して、失礼な表現が選択されることもあり得る。また、状況の中の社会的距離と心理的距離が破線になっているのは、この二つが完全に独立しているのではなく、社会的距離が心理的距離に影響を与えうることを表している。同じように、対人的要因と非対人的要因は相互に影響を与えうる。

いずれにしても、理性的または非理性的処理が行われた結果、何らかの言語的・非言語的言語行動が選択される。例えば、侵害度の高い行為であるから、より間接的な表現を選択するとか、相手がまだそれほど日本語がうまくない非母語話者であることから、明瞭に話すことを重視して、端的な表現が用いられることもあるであろう。ただし、例えば相手

が非母語話者である場合には、複雑な敬語を使うよりも率直なわかりやすい表現を選択した方がいいと考えて直接的な表現を選択するとしたら、それはPolitenessに基づく選択であるとも言える。このように考えると、Politenessと協調の原理は常に相反するものではないことになる。また、選択される言語行動は文レベルとは限らず、「依頼」などのひとまとまりの談話行動である場合もあり、そこで選択されるPolitenessもNPとPPのいずれか一つとは限らない。

図3 対人行動の選択過程



※矢印の直線はS、破線はHの選択過程を表す

こうした言語的・非言語的行動が実行されると、聞き手もまた、聞き手の立場から捉えたインターアクションの状況の中で自分の規範に照らして形成される、相手の言語的・非言語的行動に対する期待と話し手の実際の行動とを比較する。その差が聞き手の許容範囲である場合には、問題ないが、もしその差が許容範囲を越えている場合には「丁寧すぎる」、あるいは「不躰すぎる」などのマイナス評価が生まれ、マイナスの効果となる。

話し手はその効果をモニタリングしてフィードバックを行い、その言語行動が維持され、ほぼ自動化される場合もあるし、状況の把握や選択される行動が修正されるなどの調整が行われる場合もある。修正は一時的な場合もあるし、場合によっては規範の変化として、中長期的に続く場合もある。同様に、聞き手は次に話し手となり、それに先立つ相手の行動がフィードバックされて、次の行動が選択されるというように、対話は交渉を繰り返しながら双方向的に進んでいくのである。SとHの間の矢印はそれを表している。

日本語の場合であれば、通常規範と照らして、図1・2で表したような丁寧体か普通体か、あるいは尊敬語や謙譲語を用いるか否かという敬語使用または不使用の基本形の選択が常に行われることになる。このように、実際にどのような対象に対してP・Dが大きいと認識されるのかや、どのような状況において、どのような規範のPBがあり、どのような行為がPPまたはNP、あるいは(im) politeとみなされるのかは言語や文化によって異なる。しかし、図3に示した対人行動選択の過程は言語や文化を越えて普遍的であると思われる。

このモデルは、以下のような利点があり、話し手と聞き手の双方向的な対人行動として、よりトータルにインターアクションの過程を描くことが可能になったといえよう。

- ① PやDで表される社会的距離だけでなく、SとHの心理的距離も計算に入れることで、心理的な親疎に基づく選択も考慮できる。
- ② 規範やストラテジーとしての選択といった理性的な選択だけでなく、感情的な選択などの非合理的な選択も考慮できる。
- ③ 規範を踏まえて基本形が幅をもって選択されると考えることにより、一文や談話の中でのあらゆる敬語の選択が全て一定ではないという敬語選択の幅を表すことができる。
- ④ SとHの社会的・心理的距離だけでなく、Hの属性を変数に入れることにより、非母語話者や子供など、規範の異なった相手への言語行動選択も含めることができる。
- ⑤ 話し手が捉えた状況に応じた、規範選択と言語行動の選択を区別することにより、同じ言語行動が異なった動機によって選択される場合や適切な規範は選択しても、覚え違いなどで間違った言語行動を選択してしまう場合（例、尊敬語のつもりで謙譲語を使ってしまうetc.）も考慮できる。
- ⑥ 実際の行動と聞き手の期待との差から生まれる聞き手への評価や効果を加えることにより、話し手や聞き手が、状況の見積もりや言語行動の選択にフィードバックを行い、これを調整する過程も含めることができる。



#### 4. おわりに

本稿ではB&LのPoliteness理論及び宇佐美のディスコース・ポライトネスに関する考察をベースとしながらも、それに修正を加え、ポライトネスを、話し手が状況を考慮して規範に照らして幅をもって設定された基本形とそこから離脱・回帰の幅とHの期待との差が生み出す効果であると捉えて、その差が許容範囲内である場合にはニュートラルまたはプラス効果、許容範囲を越えている場合にマイナス効果になると考えた。さらに、HとSの社会的上下や親疎だけでなく、選択に関わる要因をよりきめ細かに考察するとともに、PolitenessをSとHのダイナミックな相互過程の中で成立するものと捉え、対人行動選択過程のモデルを提示した。しかし、実際にどのような状況において、どのような行為がPP・NPにあたり、どのような行為がよりpoliteであるのか、さらにはこのような状況で、どのような行動が規範にかなった基本形と受け取られるのかについては今後実証的な研究によって明らかにしていく必要がある。また、本稿で提示したモデルは、選択の原則という点ではユニバーサルであると思われるが、規範となる言語行動がそれぞれの言語や社会でどのように異なっているのかを明らかにしていくことも急務である。

このように、ディスコースレベルでの対人行動の研究はまだまだ緒に就いたばかりであると言えるが、対人行動選択の過程の普遍性という共通の枠組みの中で、日本語における実際の言語行動選択や、その言語・文化による差違について考察していくことが筆者の今後の課題である。

#### 【参考文献】

- 宇佐美まゆみ (2002a) 「ポライトネス理論から見た〈敬意表現〉」(月刊言語30-12)、大修館
- (2002b) 「ポライトネス理論の展開」 1～12 (月刊言語31-1～5, 7, 13)、大修館
- 岡本真一郎編 (2007) 『ことばのコミュニケーション 対人関係のレトリック』ナカニシ出版
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論 —ポライトネス理論からの再検討—』大修館書店
- (2008) 『ポライトネス入門』研究社
- 中山晶子 (2003) 『くろしおχブックス6 親しさのコミュニケーション』くろしお出版
- 三牧陽子 (2007) 「ポライトネス理論と初対面会話」(岡本真一郎編『ことばのコミュニケーション 対人関係のレトリック』第2章第1節30-49) ナカニシ出版
- Bowe, Bowe & Martin, Kylie., 2007. *Communication across Cultures*. Cambridge University Press.
- Brown, Penelope & Levinson, Stephen C., 1987. *Politeness: Some Universals in Language Use*. Cambridge University Press.
- Blum-Kulka S., 1987. Indirectness and politeness in requests: Same or different? *Journal of Pragmatics*, 11, 131-46.
- Fukuda, Atsushi & Asato, Noriko, 2004. Universal Politeness theory: application to the use of Japanese honorifics. *Journal of Pragmatics* 36, 1993-2002.
- Holtgraves, Thomas, 2001. *Politeness*. Robinson, W. Peter and Giles, Howard (eds.) *The*

- New Handbook of Language and Social Psychology, 341-355. John Wiley & Son.
- Ide, Sachiko, 1989. Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic Politeness. *Multilingua* 8 (2/3), 223-248.
- Matsumoto, Yoshiko, 1988. Reexamination of the universality of Face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
- Usami, Mayumi, 2002. *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Hitsuji Shobo.
- Watts, Richard J., 2003. *Politeness: Key Topics in Sociolinguistics*. Cambridge University Press.

### **On Politeness and Interpersonal Behaviors in Japanese**

KUMAI, Hiroko

Based on Brown & Levinson's Politeness Theory, Usami's concept of Discourse Politeness, and Watts' Political Behaviour, the author argues that Politeness is an effect of verbal and nonverbal behaviors resulting from the gap between the range of basic forms and the shift and recursion from those selected by the speaker and the hearer's expectations. The former is determined by taking the social norm, Polite Behavior, into consideration in accordance with the calculation of factors such as the social distance between the speaker and the hearer. The speaker can sometimes go outside the range intentionally as a strategy. If the difference between the range of basic forms and the shift and recursion from those forms is within the hearer's acceptable range in total, the behavior has a neutral or plus effect and if it's beyond the range, it has a minus effect. The author also proposes a comprehensive model which can better express the process: interactions related to Politeness are selected in that they include psychological distance and irrational choices as well as social distance and the rational choices based on the norm or strategies. It also takes the process of a two-directional interaction into consideration.